

— 国が指定する難病の一つに「潰瘍性大腸炎」がある。

「潰瘍性大腸炎は大腸の粘膜に傷、たぐれ、潰瘍ができる大腸の炎症だ。原因不明で、北欧で患者が多い。日本では、男性は20〜24歳、女性は25〜29歳に発症する人が多いが、高齢者も発症する」

「医療費の助成制度があ



腸の病気 ③

家崎医院 家崎 桂吾院長



「潰瘍性大腸炎」の理解を

り、登録患者は現在14万人以上。難病に指定されている疾患の中で最も多い。人口10万人あたり1000人程度いるといわれる。完治させる治療法がないため、患者は増加傾向にある。現在、国が指定内容の見直しを検討している」

— どのような症状があるのか。

「症状は、主に粘血便。さらに、下痢や腹痛、発熱などがある。直腸から炎症を起こし、徐々に腸の奥に広がる。重症化すると、大腸全体が炎症を起こすこと

もある。慢性的になり、良くなったり悪くなったりを繰り返す」

「病気の程度としては軽症例がほとんどで、入院することなく、外来で治療できるケースが多い。しかし、重症化して全体が炎症した場合、症状によって大腸を取るケースもある」

— 治療法は。

「完治する治療法はないが、腸の炎症を抑えて症状をコントロールする有効な薬はある。外科手術が必要になる人を除けば、ほとんどどの患者で生命予後（生命

を維持できる見通し）は、健康な人と同じだ」

「自覚症状が良くなったとしても、実際の大腸の状態が良くないこともある。内視鏡検査を受け、粘膜が治るまではしっかりと薬を服用してもらう。また、潰瘍性大腸炎を発症して7〜8年すると、大腸がんを合併する患者も出てくる。炎症が落ち着いていても、定期的な内視鏡検査は必要だ」

— 若い世代に多い病気というが、普段の生活に支障はないのか。

「社会的、肉体的ストレスにより粘血便や下痢の症状が悪化するなど、生活には支障が出やすい。学校に通ったり、仕事をしたりと社会活動が活発な世代で、女性も結婚や出産を迎える時期でもある。スーパーマーケットなど冷えた場所腹痛が起ったり、出産後は睡眠不足で症状が悪化したりと患者は大変だ」

「病気が正しく理解されず、職場で差別的に扱われるなど、つらい思いをする人もいる。潜在的に悩んでいる人が多い病気でもある。定期的な医師の診察が必要のため、社会的に広くこの病気が認知されることを望んでいる」